

9月17日(日) 研究発表第4室(716)

英文読解における未知語の類推力と語彙レベルの関係

How Much can Vocabulary Levels Predict Inferencing of Unknown Words in EFL Reading comprehension?

東京学芸大学附属高校・教育工学センター(兼任) 山内 豊

reading comprehension, strategies, inferencing, vocabulary levels, nonsense word test

1. はじめに

本研究は、日本人英語学習者の英文読解における未知語の文脈類推能力および文脈類推ストラテジーの使用を、読み手の語彙レベルとの関係に着目して考察し、学習者の未知語の類推力を高めるために必要な要因をさぐる。

2. 未知語の文脈類推の定義とその過程

未知語の文脈類推とは、(1) 明示的に文中に書かれた情報および(2) 読み手がもっている背景知識 (background knowledge or content schema) という2つの情報を使って、文中の未知語の意味を考え、理解しようとするものである。

未知語の文脈類推は、情報の意味処理の観点から、次の4つの過程からなると考えられる。未知語を類推する場合、読み手は、未知語の類推のヒントとなる語句を文中から抽出(sampling)し、そのヒントを基に、読み手自身も持っている内的知識から、文脈に適切な背景的知識を選択・活性化させ、未知語の意味についての仮説を立てる(hypothesizing)。そして、英文を読み進めながら、この仮説が正しいかどうか検証し(testing)、確認する(confirming)。もし仮説が誤りなら、新しい仮説を立てて再びテストしていく。このように、bottom-up と top-down の両プロセスを interactive に駆使しながら、未知語の文脈類推は行われると考えられる。(Goodman 1967, Gough 1972, Rumelhart 1977, Carrell 1987)。ここでは、未知語の類推に関わる諸要因の中から、未知語に対するヒントの位置と読み手の語彙力という2つの要因に着目する。

3. 未知語と文脈ヒントの位置(文脈ヒントの利用ストラテジー)

未知語の文脈上のヒントになる語句が、うまく抽出されるか否かは、類推の成否を決定する大きな要因である。Chern(1993)に基づき、文脈ヒントの位置(方向と距離)から、ヒントを利用するための5つのストラテジーを以下のように分類した。

- (1) ヒントが未知語を含む文の中にある場合 (local)
- (2) ヒントがその文より前(今まで読んだ部分)にある場合 (backward)
- (3) ヒントがその文より先にある場合 (forward)
- (4) 未知語とヒントとの距離が近い場合 (close)
- (5) 未知語とヒントとの距離が遠い場合 (distant)

4. 読み手の語彙力

読み手の語彙力は、読解力を構成する重要な要素の1つであり、語彙力がどのレベルにあるのかによっても、未知語のヒントになる語句の抽出の成否に大きな影響を与えると考えられる。

5. 仮説設定

本研究では、語彙力と未知語の類推力に関して、次の2つの仮説が立てられた。

- (1) 読み手の語彙レベルによって、未知語の類推力を予測できる。
- (2) 読み手の語彙レベルから、文脈類推ストラテジーの使用可能性を予測できる。

6. 方法

2つの仮説を検証するために、(1) 人工語の意味類推テスト (nonsense word test)、(2) 語彙レベル判別テスト、(3) 背景知識チェック・アンケートという3つからなる実験が、この順序で、260人の高校3年生に実施された。

意味類推テストは、読み手が今までに読んだことのない約250語の英文に12語の人工語(nonsense word)が含まれており、それらの意味を類推させて、日本語か英語で書かせるものである。各々の人工語は、その意味を類推するために、必要な文脈ヒントとして local, backward, forward のタイプ別に含まれている。つまり、読み手は、ある未知語を正しく類推するためには、それに対応した文脈ヒントを利用しなければならない。各々の未知語の正解率から、どのタイプの文脈ヒント利用ストラテジー(local, backward, forward, lose, distant)が、どれだけ使用されたかを測定することができる。このテストは事前に5人の native speaker に、各々の未知語を類推する上で、十分なヒントが本文に含まれているか否か、そのヒントのタイプに関する分類は妥当であるかにかについて十分検討された後で、本実験が実施された。

語彙レベル判別テストは、被験者の語彙力が、2,000語未満、2,000語、3,000語、4,000語および大学専門用語レベルのうちの、どのレベルにあるかを判別するテストで、単語とその定義文とを組み合わせる(matching)形式の計72題からなる。この2,000語レベルに関して、頻出度の先行研究から、高頻出語2,000語で、任意に選ばれた英文中の87%の語彙を統計的にカバーすることがわかっている(Nation, 1990)。すなわち、2,000語レベルの学習者にとって、任意の英文100語中、87語が既知語になり、13語が未知語になると統計的に考えられる。

背景知識チェック・アンケートは、意味類推テストで使用された英文に対する背景知識保有度を確認するための質問紙調査である。

7. 結果と考察

7.1. 結果の信頼性

実験の結果は、語彙レベル判別テスト、人工語の意味類推テストについて、各々、.80, .82という高い信頼度係数(KR-21)が得られた。(信頼度係数の値は、.4から.7までは十分な信頼性があり、.7以上は高い信頼性があるとされる。)

7.2. 語彙レベルと類推力

語彙レベル判別テストと意味類推テストの結果から、語彙レベルと類推力の間に有意で高い相関($r=.78, p<.0001$)が認められ、前者で後者の約64%を予測できることがわかり、仮説1は支持された。任意に選ばれた英文中の87%の語彙を統計的にカバーする2,000語レベルを境に、類推テストの成績に有意な差($F(3, 244)=74.48, MS_e=5.459, p<.0001$)が見られたことから、これが類推に必要な最低限の語彙レベル(threshold)である可能性が高いことが示された。2,000語未満の学習者にとっては、bottom-up 処理において、類推のヒントになっている単語の意味さえもわからないため、適切な背景知識を導き正しい類推を行う top-down 処理ができなくなると考えられる。

7.3. 語彙レベルと文脈類推ストラテジーの使用度

語彙レベルと類推ストラテジーについては、2,000語レベル(word family)未満の学習者は、どの類推ストラテジーも2~3割しか使用できず類推に失敗すること、2,000語および3,000語レベルでは local, backward は約6割使用できるが、forward の活用は5割程度にとどまり、forward も7割以上使用するには、4,000語レベルが必要とされることがわかり、仮説2も支持された。

言語教育への示唆として、文脈の意味類推を促す読解指導は、学習者が2,000語以上のレベルになれば、ほとんど意味をなさないこと、習得すべき語彙目標として、2,000語レベルが primary goal となりうることが提言された。